

様式1

令和5年度 学校評価表

学校教育目標		凜とした「元氣・感動・温もり」のある生徒の育成												
a ミッション		学びを探究し、未来を“そうそう”する生徒の育成				a ビジョン		職員が笑顔で生徒の前に立てる学校 ○生徒が安心して学べ、確実に力を付けることができる学校 ○保護者や地域からも信頼され、任せてもらえる学校 ○教職員がやりがいと喜びをもち、笑顔で取り組める学校				尾道市立長江中学校		
評価計画						自己評価					学校関係者評価			改善計画
b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月	1月	h 度達成	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価			l コメント	m 改善案
					g 達成値	g 達成値				イ	ロ	ハ		
主体性・協働性を育む探究的な学習の推進	○学習内容の確実な定着及び活用 ・知的好奇心を喚起する授業実践 ・新たな価値観を見いだせる授業づくり	・小中連携教育の意義について理解し、積極的に各小学校の研究授業に参加 ・小中の接続を意識し、9年間を見通した総合的な学習の時間の単元開発	①生徒アンケートの「授業では解決しようとする課題について、『なぜだろう』、『やってみよう』、『やってみよう』と試みる」という問いに肯定的に回答している生徒の割合（昨年度80%）	①85%	①81.5%	①96%	①C	①生徒アンケートの「授業では解決しようとする課題について、『なぜだろう』、『やってみよう』、『やってみよう』と試みる」という問いに肯定的に回答している生徒の割合81.5%であった。昨年度80%であったので、各教科での工夫が生徒の意欲向上につながってきている。 ②長江小学校の研究授業には出張等での欠席を除き、参加することができた。研究協議にも率先して参加することができた。本校の指導にも活かしていく。また、ブロック研修会も2回実施することができた。 ③1学期は2学期に行われるPBLの授業研や公開研に向けて、各学年とも計画的に進めることができた。3年間の研究の集大成となるように、取り組んできた成果を披露していく。	3			①生徒が主体性をもっていろいろなことに取り組んでいることが窺えた。小中連携も良いと思う。様々なことにチャレンジしてもらいたい。	①目標の85%に向け、学校全体で研究をさらに進めていく。研究授業だけでなく、日々の授業の中で、探究的・主体的な実践ができるように、単元末のパフォーマンス課題を設定するなど、教材研究を行っていく。 ②校区内で小中連携を推進するために、一学期は研究主任の連携を大切にしたい。ベクトルをそろえ、一貫した実践ができるよう心がけてきた。それを継続して取り組んでいく。 ③授業公開に向けて、県指導主事を招聘して研修を実施する。各学年の昨年度の取組をふまえて、今年度はブラッシュアップできるようにする。	
			②各小学校（3校）の研究授業に参加する教員の割合	②100%	②－	②－	②－							
			③9年間を見通した総合的な学習の時間の授業公開（今年度3年目）	③11月に公開	③－	③－	③－							
人間力を高める教育実践	○「学びの風土づくり」三原則の徹底と深化による「長江プライド」の醸成と自己肯定感の向上	・生徒が主体的に企画する活動（挨拶運動や地域貢献活動等）への支援 ・生徒の主体的な活動に対する教師による肯定的評価の実施	①生徒アンケートの「自ら進んで挨拶をしている」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合（昨年度90%）	①90%	①86.3%	①96%	①B	①生徒アンケートの「自ら進んで挨拶をしている」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合86.3%であった。（昨年度90%）また、「地域の方に会ったら、自分からあいさつをしている」では74.9%であった。日々の授業や行事等で、自分の役割を責任を持ってやりきらせる経験を積ませることで自信を持たせ、受け身ではなく自分から進んであいさつや行動ができるようにする。 ②教師アンケートの「自分は、生徒が自ら進んで挨拶をするよう、指導している」旨の問いに肯定的に回答している教員の割合は100%（昨年度100%）であったが、実際に教員が「生徒が自ら進んで挨拶をしている」と感じる割合は、生徒の20%である。生徒の評価と理解がある。 ③生徒アンケートの「自分には良いところがある」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合は76.5%であった。（昨年度77%） ④生徒アンケートの「自分のよさは、まわりの人から認められていると思う」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合は82.6%であった。（昨年度88%）生徒が自ら「考え、判断し、行動する」という「自己決定の場」を様々な教育活動の中で仕組んでいき、自己認識を深めさせる。	3			①② ○挨拶の評価方法を、教員と生徒間で協議し、共通認識をもたせたい。 ○挨拶を強制するのではなく、なぜ、どういう効果があるのかについて議論して行動した方がよい。 ③④ ○生徒間でよい意味で刺激を受け合いたい。勉強や部活など、向上させてほしい。 ○いろいろなタイプの生徒がいる。いろいろなことだわりを尊重し合える校風にしてほしい。	①②アンケート結果から、生徒と教員の間で、「主体的」の捉えが違っているように見える。委員会を中心として、「自ら進んでする挨拶」について議論する機会を設けていく。 ③④ ○地域的に、教育熱心な保護者が多く、学業や高校受験において、親からのプレッシャーに弱い生徒が多く見られる。レジリエンスを高められるような取組も実践していきたい。 ○生徒の自己肯定感の向上について、目標値は上回っていないが、8割の生徒が肯定的評価をしている点は評価できる。教育活動全般において、生徒間でお互いよい刺激を受け、自他共に向上していける人間関係を築けるよう、よりよい学級経営に注力していく。	
			②教師アンケートの「自分は、生徒が自ら進んで挨拶をするよう、指導している」旨の問いに肯定的に回答している教師の割合（昨年度100%）	②100%	②100%	②100%	②A							
			③生徒アンケートの「自分には良いところがある」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合（昨年度77%）	③80%	③76.5%	③96%	③B							
職員が笑顔で生徒の前に立てる職場環境	○働き方改革の推進（業務改善への志向を含む）	・主任・主事を中心とし、校内及び分掌・学年間で協働すること、円滑な業務推進を図る。	④生徒アンケートの「自分のよさは、まわりの人から認められていると思う」旨の問いに肯定的に回答している生徒の割合（昨年度88%）	④85%	④82.6%	④97%	④B	今回のアンケート結果から、目標の80%には届いていなかった。しかし、各自が時間外勤務の目標値を設定し、昨年度より削減しようとする意欲が窺われる。お互いに声かけができていけるのは、良い点である。	3			○先生方が授業準備など生徒との関わりをより多くもつためにも、事務作業や報告事項など、一中学校では対応しにくいことを、ぜひ教育委員会単位や文部科学省で組織的に行ってほしい。行政がモデル校を作り、推奨していくのも一案といえる。教員志望者がこれ以上減らないように対策をしてほしい。 ○校内で、スリム化できる業務を推進して欲しい。	日々の業務の中で充実感を得られるための改善策を、校内研修等を利用して意見交換する。具体的には、個人で自己を振り返り改善点を考える。その後グループで意見交流する。最終的に校内で、個々や分掌等学校全体の業務のスリム化を図るためにどうすればよいかが具体策を協議する。	
			「学校における働き方改革アンケート」の項目『日々の業務の中で充実感を得られている』の問いに肯定的に回答している職員の割合（昨年度64.7%）	80%以上	約70%	約88%	C							

【自己評価 評価】
A：100≦（目標達成）
C：60≦（もう少し）＜80B：80≦（ほぼ達成）＜100
D：（できていない）＜60

【外部評価】 イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。 ハ：わからない。